

令和4年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国語

試験時間 50分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全15ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって解答用紙を提出してください。
- 解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名

一

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 欠員を補う。
- ② 海外を訪れる。
- ③ 賃金をもらう。

問2 次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① 古キズがうづく。
- ② ごみをス|てる。
- ③ 各国の首ノウ|が集まる。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本人は自己主張が苦手だと言われる。グローバル化の時代だし、もっと自己主張ができるようになっていけななどと言う人もいる。でも、日本人が自己主張が苦手なものには理由がある。そして、それは①決して悪いことではない。

では、アメリカ人は堂々と自己主張ができるのに、僕たち日本人はなぜうまく自己主張ができないのか。

それは、そもそも日本人とアメリカ人では自己のあり方が違っていて、コミュニケーションの法則がまったく違っていているからだ。

アメリカ人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は、相手を説得し、自分の意見を通すことだ。お互いにそういうつもりでコミュニケーションをするため、遠慮のない自己主張がぶつかり合う。お互いの意見がぶつかり合うのは日常茶飯事なため、まったく気にならない。

一方、日本人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は何だろう。相手を説得して自分の意見を通すことだろうか。そうではないだろう。僕たちは、自分の意見を通そうというより前に、相手はどうしたいんだろう、どんな考えなんだろうと、相手の意向を気にする。そして、できることなら相手の期待を裏切らないような方向に話をまとめたと思う。意見が対立するようなことはできるだけ避けたい。そうでないと気まずい。

つまり、僕たち日本人にとっては、コミュニケーションの最も重要な役割は、お互いの気持ちを結びつけ、良好な場の雰囲気^{ふん}を醸^{かも}し出すことなのだ。強烈な自己主張によって相手を説き伏^ふせることではない。

だから自己主張のスキルを磨^{みが}かずに育つことになる。自己主張が苦手なのは当然なのだ。その代わりに相手の気持ちを察する共感性を磨いて育つため、相手の意向や気持ちを汲^くみ取ることができる。

相手の意向を汲み取って動くというのは、僕たち日本人の行動原理といってもいい。コミュニケーションの場面だけではない。たとえば、何かを頑張るとき、ひたすら自分のためというのが欧米式だとすると、僕たち日本人は、だれかのためという思いがわりと大きい。

親を喜ばせるため、あるいは親を悲しませないために勉強を頑張る、ピアノを頑張る。先生の期待を裏切^うらないためにきちんと役割を果たす。そんなところが多分にある。大人だって、監督^{かん}督^{とく}のために何としても優勝^う勝^{とく}したいなんて言ったりするし、優勝^う勝^{とく}すると監督^{かん}督^{とく}の期待に応^おえることができている^てとホッとしている^ると言ったりする。

自分の中に息づいているだれかのために頑張るのだ。もちろん自分のためでもあるのだが、自分だけのためではない。

このような人の意向や期待を気にする日本的な心のあり方は、「他人の意向を気にするなんて自主性がない」とか「自分がない」などと批判されることがある。でも、それは欧米^③的な価値観に染まった見方に過ぎない。

教育心理学者の東洋^{あづまひろし}は、日本人の他者志向を未熟とみなすのは欧米流であって、^④他者との絆を強化し、他者との絆を自分の中に取り込んでいくのも、ひとつの発達の方向性とみなすべきではないかという（東洋『日本人のしつけと教育——発達の日米比較^{かく}にもとづいて』東京大学出版会、一九九四年）。

（中略）

関係性を生きる僕たちの自己のあり方は、「人間」という言葉にもあらわれている。哲学者の和辻哲郎^{わつじてつろう}は、「人間」という言葉の成り立ちについて疑問を提起している。「人」という言葉に「間」という言葉をわざわざ付けた「人間」という言葉が、なぜまた「人」と同じ意味になるのかというのだ（和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波書店、一九三四年）。

「人」だけでもいいのに、なぜわざわざ「人間」というのか。なぜ「間」を付けても意味が変わらないのか。ふだん当たり前のように使っている「人間」という言葉だが、改めてそう言われてみると、たしかに妙^{みょう}だ。

和辻によれば、辞書『言海』に、その事情が記されている。もともと人間という言葉は「よのなか」「世間」を意味していたのだそうだ。それが「俗^{ぞく}に誤って人の意になった」。つまり、「人間」というのは、もともとは「人の間」、言い換えれば「人間関係」を意味する言葉だったのに、誤って「人」の意味に使われるようになったのだという。

誤って使われたのだとしても、なぜまたそんな誤りが定着したのか。^⑤そこにこそ大きな意味があるのではないか。

（中略）

ここからわかるのは、日本文化には、「人＝人間関係」というような見方が根づいているということだ。

和辻は、そのところをつぎのように説明する。もし、「人」が人間関係とはまったく別ものとしてとらえられているのであれば、「人」と「人間関係」を明確に区別すべきだろう。それなのに、日本語では「人」と「人間関係」を区別せずに、「人間関係」や「よのなか」を意味する「人間」という言葉が「人」の意味で用いられるようになった。ここにこそ、日本的な「人」のあり方が示されている。

^⑥僕たち日本人にとって、「人間」は社会であるとともに個人なのだ。

このように、日本文化のもとで自己形成をした僕たちの自分というのは、個としてあるのではなく、人とのつながりの中にある。かかわる相手との間にある。

一定不変の自分というのではなく、相手との関係にふさわしい自分がその都度生成するのだ。相手あつての自分であり、相手との関係に依りて自分の形を変えなければならない。だからこそそのことが気になる。人の目が気になって仕方がないのだ。

（榎本博明『自分らしき』って何だろう？』

問1 ぼうせん部①「それはけつして悪いことではない」とはどういうことか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は他者との繋がりを大切にすることで、アメリカ人よりも他者の心理に寄り添うことが得意になったと考えているから。
- イ 日本人は他者の意向を優先することにより、アメリカ人よりも意見の衝突が少なく良好な場を提供できると考えているから。
- ウ 日本人は相手の気持ちを汲み取る感覚を磨き、自己主張しなくても相手を納得させることが得意になったと考えているから。
- エ 日本人の期待を裏切らない誠実な姿勢はグローバル化が進む時代で貴重であり、国際的な友好関係を築く場面で重宝されるから。

問2 ぼうせん部②「優勝すると監督の期待に応えることができてホツとしていると言ったりする」のはなぜか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他者の意向を汲み取って動くことは日本人の行動原理であり、優勝は監督のプレッシャーから解放されることを意味するから。
- イ 自分よりも他者のために頑張ることが日本人の行動原理であり、優勝することで監督を落胆させることなく終えられたから。
- ウ 頑張るときに他者への思いが大きいのが日本人の特徴であり、優勝して監督の喜んでいる姿を見たことに嬉しさを感^{うれ}じているから。
- エ 自己主張は苦手だが他者への思いが強いことが日本人らしさであり、優勝したことで初めて監督に感謝を伝える機会を得たから。

問3 ぼうせん部③「欧米的な価値観」とあるが、どのような考えか。本文中の語句を使ってわかりやすく説明しなさい。

問4 ぼうせん部④「他者との絆を強化し」とあるが、どういうことか。本文中の語句を使ってわかりやすく説明しなさい。

問5 ぼうせん部⑤「そこ」が指している内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「人」と「人間」が同じ意味であり、差がないということ。
- イ 「人間」はもともと人間関係を表す言葉だったということ。
- ウ 「人間」が誤って「人」の意味で使われ、そのまま定着したこと。
- エ 「人」と「間」が合わさって「人間」という言葉ができたこと。

問6 ぼうせん部⑥「僕たち日本人にとって、『人間』は社会であるとともに個人なのだ」の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は「人」と「世間」とは切り離せないと考えており、「世間」あってこそその自分だと考えているということ。
- イ 日本人は「人」と「よのなか」とを別ものだと考えて、「よのなか」を最優先すべきと考えているということ。
- ウ 日本人は「人」と「人間関係」とを区別するべきだが、相手に依存することから抜け出せていないということ。
- エ 日本人は「人間」と「人間関係」とを分けて考えるべきだが、定着した意味を変えることは難しいということ。

問7 本文の内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本文化と欧米文化を比較しながら、グローバル化の時代では日本人も自己主張を強めていくべきだと主張している。
- イ 冒頭はコミュニケーションのあり方が日本とアメリカで異なることに注目し、それぞれの法則について端的に論じている。
- ウ 「人間」の語源を探っていくことによって、日本人の文化形成にとって言葉が大きな役割を果たしたことを賞賛している。
- エ 親や先生との身近に感じられるエピソードを具体的に示すことにより、その先からの展開に説得力を持たせている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の白石弥生の通う北海道の生田羽中学校は全校生徒が五名の分校であり、弥生は学校で唯一の中学三年生だ。他の四名の生徒はみんな一年生である。

こない。

桐子きりこさんから返信が来ない。

どうしてだろう、毎日何回も、メールしているのに。前はちゃんと返事してくれたのに。

白石弥生やよいは机の下でかたくなに沈黙を守る携帯電話けいたいを握りしめながら、下唇くちびるをきゅつと噛かんだ。

「白石さんは、このあと職員室に来てもらえるかな」

帰りの学級活動が終わる直前、後藤先生ごとうが言った。

弥生の顔を見て、先生は「ああ、怒るとかじゃないよ。修学旅行の話なんだ」と、誤解を解くように、朗らかに手を振った。

「修学旅行だって。いいなあ」

明るい声をあげた松本憲太けんたを、弥生はちらつと見た。

「去年の、楽しかったよな。亮介りょうすけも一緒にしよに行けたらよかったのにな。風邪かぜなんかひきやがってついてないよ」

憲太が小学校六年生時の修学旅行の際、札幌ドームで観たというプロ野球の話——もう何度も耳にしたことがある——をしはじめたので、後藤先生は二度手を叩たたいてそれを制止した。憲太は素直に引き下がったものの、最後に「いいなあ、修学旅行」と締しめるのは忘れなかった。

のんきな子だと弥生は思った。あの子は本当に裏表がない。いいなあ、と言ったなら、あの子は本気で羨うらやましがっているのだ。修学旅行も、憲太なら十二分に楽しんだだろう。彼にとつては、修学旅行という単語は、自分の欲しいものがたくさん詰まっているおもちゃ箱みたいな響きなのだ。

憲太にはわからない。

あの子だけじゃない、一年生四人全員、わかりやしない。^②私の気持ちなんで。

弥生は目を落として、自分の太股ももの上にある携帯電話を見つめた。

桐子あてに、今日は五回メールを送っている。

一時間目が始まる前。

三時間目と四時間目の間。

お昼休みに二回。

そして、ついさつき。

今村桐子は弥生の一年先輩だ。^③しかしただの先輩というよりは、友人、もつと言えば親友に近い関係だと、弥生は思っている。

生徒数が圧倒的に少ないこの分校で、桐子もその学年唯一の女子だった。弥生と桐子との違いは、弥生は学年でたった一人の生徒だけれど、彼女には同学年にもう一人男子がいた、ただそれだけだ。桐子たちより一つ上の学年には生徒がいなかったから、必然的に同性の弥生と桐子は話をするようになり、打ち解けた。体育や音楽の授業が合同だったということも、二人を接近させた。顔立ちも似ていて、村外で一緒にいると、まれに姉妹に間違われた。

この春から、桐子は隣町の公立高校へ進学した。

いつくらいからだったろう、桐子からのメール返信が間遠になり始めたのは。

弥生は職員室へ歩きながら考えた。

春休みの期間はそんなことはなかったし、数回は直接会って、互いの部屋でマンガを読んだり、隣町まで足を延ばして、映画を一緒に観たりなどした。^④隣で歩く桐子の、風に揺れる長い髪の毛のきれいさは、ついこの間のもののようなのに。

最初は遅れるだけだった。けれど、ゴールデンウィークを目の前にした今は、メールそのものが来ない。部活動を始めたとは聞いていない、勉強が忙しいのかもしれない。

でも、日に一度くらいメールをくれたっていい。受験勉強の合間にだってくれていたのだから。

学年は違うけど、友達なのに——弥生はまた下唇を噛む。

鞆^{かばん}を持って職員室へ入ると、三人の先生たちが笑いかけてきた。一礼して顔を上げたとき、教師の中の一人と目が合った。この春から赴任^ふしてきた社会科の若い教師だ。^⑤弥生は笑い返さなかった。このごろはこちらのことを考えて、わりに熱心に教えてくれるようになってきたけれど、初めはひどかった。明らかに去年のテストを再利用したやつつけない問題を解かせては、その時間先生のくせに内職をして、いいかげんに、適当に、という気持ちで筒^{つづ}抜けだった。

ちよつと頑張り^{がん}だしたからって、おいそれと甘い顔をしてあげるほど、自分は子どもじゃない。一年の手塚^{てづか}みなみなら騙^{だま}されるかもしれないけれ

ど。あの子はまだ幼いから——弥生はにきびだらけの少女の顔を思い起こす——あの子が私みたいだったらいいのに。年上とも話ができる大人っぽさがあればいいのに。あの子とは到底仲良くなれそうにない。

桐子がいなくなってしまった生田羽分校で、^⑥弥生は自分だけが一人浮きあがっているように感じる。

「白石さん、じゃあこっちに座ってくれる？」

後藤先生が壁際から、背もたれの丸い小さな椅子を引つ張ってきて、先生のデスクの右袖に置いた。弥生はそれに従った。

後藤先生の机の上には、『生田羽中学校修学旅行について』というプリントがあった。

「五月の第三週、三泊四日だよ。楽しみだね」

全然楽しみではない弥生だが、その感情を前面に押し出すのは幼すぎると自戒し、頷いてみせる。「……はい」

「朝七時半に集合して旭川空港まで貸切バス、空港から羽田へ飛んで、その日は東京をいろいろと……」

プリントに書いてある大まかなタイムテーブルを、丁寧に説明する後藤先生の横で、弥生はこっそりとスカートのポケットに手を入れ、中に入れてきた携帯を探る。

震えて、と念じながら。

「……それでね、ゴールデンウィークが明けて六日の五時間目と六時間目は、本校の方でオリエンテーションなんだ」

「そうですか」

小学校六年生のときと同じ流れである。^⑦弥生の心に生まれたひび割れから、憂鬱がじわりじわりと漏れ出し、^⑧全体を冷たくひたしていく。携帯は、じっとしたままだ。

「オリエンテーションの日は、林先生が本校まで車で送るからね。もちろん、帰りも迎えに行くよ」

その名前の方へ視線をやると、うさんくささがぬぐえない若い先生は、また表情を柔らかくした。

「ありがとうございます、お願いします」

弥生はプリントを受け取り、鞆に入れて、立ち上がった。

職員室を出るときにまた礼をしたら、やっぱり三人の先生方はにこにこしていた。

憲ただけじゃない、先生も修学旅行は生徒にとって、無条件に楽しいイベントだと思っているのだ。

常識的に考えれば、それは正解かもしれない。でも、分校の生徒にとっては、特に自分のような子には、当てはまらない。小学生のときは一泊二

日だったから、なんとかごまかしごまかし、しのぎきることができたけれど、今回はどうだろう？

分校の生徒数は少ない。特に弥生は分校内でたった一人の三年生だ。だから、分校単独での修学旅行は成り立たない。本校の生徒に交じって行く仕組みになっている。

ろくに会ったことも話したこともない子たちの中に一人ぼっちで放り込まれて、どうやって楽しくすればいい？ そんなこと、できるはずない。本校の子と一緒にいくくらいなら、修学旅行なんて別になくなっちゃっていいのに。

弥生は玄関で外靴に履き替えるのも [X]、ポケットから携帯を取り出して、桐子にメールを打った。

『桐子さん』

今、後藤先生に呼ばれて、修学旅行の話をしたの。

来月第三週の月曜から三泊四日。東京と千葉と名古屋だって。去年の桐子さんときもそうだったよね？

ああもう、本当に嫌だな。行きたくないな。風邪ひかないかな。病気になるったら休めるのに。

どうせ行くなら、一年繰り上げて、去年桐子さんと一緒に行きたかったな。

一年生の子たちはもちろん、先生たちも私の心の中なんて全然わからないんだ。

でも桐子さんなら、わかってくれるよね？』

弥生は文章を一度だけ読み返してから、送信ボタンを押した。

——桐子さんなら、わかってくれるよね？

気持ちを尋ねているのだから、きつと返信をくれるはずと、弥生は携帯のマナーモードを解除して、鞆の中に入れた。

「じゃあ白石さん、行こうか」

弥生は小さく頷いて、林先生の車の助手席に乗り込んだ。シルバーっぽいコンパクトカーの側面にはうっすら汚れがついていて、弥生は風にひるがえるベージュのコートがそれに触れないよう、気をつけなければいけなかった。

車の中は、弥生が嗅いだことのない、柑橘系の芳香剤の匂いが爽やかに漂っていた。

シートベルトを締めてから、携帯電話が入っている鞆を胸の前で抱える。

「本校の生徒たちとこういった行事に参加するのは、いつ以来？」

林先生が明るく訊いてくるのを、弥生はうつとうしく思った。

「……去年の遠足のとき以来」

あのときはまだ良かった。分校生徒全員が一緒だった。つまり桐子がいた。

「そうか。遠足か。懐かしい響きだなあ……」

林先生と親しくしゃべる気のない弥生は、鞆の中から携帯を取り出した。普通の感覚を備えていれば、それとない拒絶の雰囲気を感じるだろう。実際林先生は黙った。

弥生は村の南側へ向かう車窓の景色など一切無視して、携帯の液晶画面のみに視線を集中させた。メールボタンを押し、受信トレイを呼びだす。職員室で修学旅行のプリントをもらったあと、桐子あてに送ったメールも、すぐには返信が来なかった。待つて待つて、ようやく携帯が歓喜の声をあげたのは、ゴールデンウィーク初日の四月二十九日の夜だった。

『修学旅行楽しんで来てね』

メールはたった一文で終わっていた。けれども、返事をくれたことは嬉しかった。

弥生はすぐそれに返信し、連休中一度会ってどこかへ行かないかと誘った。

一日待つてもなにも反応がなかったので、直接電話をした。もたもたしていたらゴールデンウィークなんて、朝顔の花みたいにすぐ終わってしまうからだ。

——もう、他に予定があるの。ごめんね、また今度。

桐子はなんとなく普段より早口だったように思う。結局連休中に桐子と会うことはなかった。

液晶画面に表示される一文を、^⑧弥生は見つめ続けた。

本校の生田羽中学校は、分校と同じく二階建てだが、造りは木造ではなく鉄筋だった。弥生がまた小さいころ、建て替えられたのだ。なんの面白みもない小さな箱みたいに見えるが、校舎全体にスチーム管が行きわたっていて、ダルマストーブなんてどこにもない。

来客用の玄関から中へと入る。弥生はコートを脱ぎ、携帯電話をスカートのポケットに忍ばせた。

林先生は弥生を本校の職員室に連れていった。すぐに痩せて背が高い、顔いっぱい皺が寄った先生が、いつそうその皺を笑みで深くしながら近

づいてきた。

教頭先生の宮川先生だった。佐々原先生が急に体調を崩して四日ほど休んだとき、分校にピンチヒッターで来てくれたことがあるから、弥生も顔と名前は知っていた。

今年の修学旅行の引率責任者だと、宮川先生は弥生と林先生に言った。

「じゃあ、終わるころにまた迎えに来るからね」

そう弥生に告げ、宮川先生に「よろしくお願ひします」と頭を下げて、林先生はいったん分校へ帰っていった。

最初のイメージの悪さを引きずって、林先生のことをまだ好きになれない弥生だったが、それでも分校の人間がそばに誰もいなくなり、一人本校に取り残されると、^⑨なんだか服が透明になってしまったみたいなの、いたたまれなさ、居心地の悪さを強く感じた。

「白石さん、それでは三年生の教室へ行きましょう」

宮川先生の言葉に頷くものの、気分は晴れない。分校とは違うビニールの床材にスリッパの底が吸いつくようので、弥生は何度となく立ち止まりたくなった。そのたび、自分を奮い立たせ、意識して背を伸ばした。

教室へ入る前、弥生はセーラー服の胸元のスカーフがきちんと結ばれているか、手で触れて確かめた。変になっていたら、それだけでいい嗤いものになる。

前方の戸から宮川先生に続いて中へ足を踏み入れると、物珍しげな視線が一気に集中するのがわかった。促されて宮川先生に続いて教壇の横に立ち、弥生はそれらの視線と孤独に対峙する。

（乾ルカ『願ひながら、祈りながら』）

問1 ぼうせん部①「下唇をきゅっと噛んだ」とは弥生のどのような心情を表現しているか。説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア なぜか、と悔しさをこらえている。

イ おかしい、と怒りを爆発させている。

ウ どうして、と不思議に思っている。

エ 理解できない、と嘆いている。

問2 ぼうせん部②「私の気持ちなんて」とはどのような気持ちか。説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 知り合いのいない修学旅行になんて行きたくないという気持ち。
- イ 年下の男の子にうらやましがられて情けないという気持ち。
- ウ 私に野球の話をされても意味がないとむなしく思う気持ち。
- エ 憲太のように素直になれず、年下をうらやましがる気持ち。

問3 ぼうせん部③「しかしただの先輩というよりは、友人、もつと言えば親友に近い関係だと、弥生は思っている」とあるが、このように思っ

いた理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 二人はお互いに外見も内面も似ていると感じていたから。
- イ 幼いころからずっと一緒に同じ時間を過ごしてきたから。
- ウ 学年は違うが、授業を一緒に受けることで仲良くなったから。
- エ 会えていなくても、お互いがお互いを思っているから。

問4 ぼうせん部④「隣で歩く桐子の、風に揺れる長い髪の毛のきれいさは、ついこの間のもののように」は何を表現したいのか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「ついこの間のもののように」に感じられる、弥生の動揺した様子。
- イ 「髪の毛のきれいさ」を思い出せるほどの、桐子と弥生の親密さ。
- ウ 「隣で歩く」ことにより鮮明に記憶された、風に揺れる髪の毛の臨場感。
- エ 「風に揺れる」が象徴する、弥生に勝る桐子の快活さ。

問5 ぼうせん部⑤「弥生は笑いかえさなかった」とあるが、なぜか。理由を説明しなさい。

問6 ぼうせん部⑥「弥生は自分だけが一人浮きあがっているように感じる」とあるが、どういふことか。説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 最上級生になった弥生は、自分がすっかりしなくてとは考え、舞い上がっているということ。
- イ 桐子が隣の高校へ進学したため、唯一の最上級生として異質な存在になっているということ。
- ウ 仲のよい人が遠くへ行ってしまったことで、孤独になってしまっているということ。
- エ 一人では楽しめることも見つけられず、クラスの中で浮いた存在になってしまっているということ。

問7 ぼうせん部⑦「弥生の心に生まれたひび割れから、憂鬱がじわりじわりと漏れ出し、全体を冷たくひたしていく」は何を表現しているのか。説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア また本校と一緒に修学旅行に行くのかという思いが、時間の経過とともに弥生を苦しめ、気持ちが沈んでいる様子。
- イ 本校に行かなくてはいけないという気の進まない行事のために、弥生は生きた心地がなくなっている様子。
- ウ 小学校時代からずっと続いている嫌な気持ちだが、携帯が鳴らないことで弥生の限界を越えてあふれかえっている様子。
- エ 小学生の時と同じように、物事を楽しめない弥生の気持ちだが、周りにいる大人に気をつかわせてしまっている様子。

問8 空欄 X に当てはまる言葉として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア もどかしく イ やるせなく ウ 無理はなく エ 待ち遠しく
- 問9 ぼうせん部⑧「弥生は見つめ続けた」とあるが、このときの様子として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 桐子からの返信はやはりうれしく、林先生との重苦しい空間から逃れたいと考えている。
 - イ 二人はやはり繋がっていたのだという安心感が本校に向かう弥生にとって活力となっている。
 - ウ 自分の予想に反する返答に驚いたとともに、桐子のそっけない対応に不安を感じている。
 - エ 桐子の異変をひしひしと感じ、会えなかった理由を再度尋ねようとメールの文面を考えている。

問10

ぼうせん部⑨「なんだか服が透明になってしまったみたいな」とは弥生のどのような気持ちを表現しているか。説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア すべてを見透かされているような気持ち
- イ 自分がこの場にはいけないような気持ち
- ウ 不釣り合いなものを押しつけられたような気持ち
- エ 緊張きんがなくなり無気力になったような気持ち

四

次の各問いに答えなさい。

問1

①・②の□にふさわしい言葉を入れ、ことわざを完成させなさい。

① くさつても□

ア 友 イ 孫 ウ 鯛 エ 草

② 他山の□

ア 石 イ 意志 ウ 医師 エ 意思

問2

次の空欄にあてはまる言葉を後から一つ選び、記号で答えなさい。

① () 成績に次回はがんばろうとちかった。

ア たよらない イ だらしない ウ この上ない エ ふがない

② 自由と平和を尊重するのは人類()の考え方だ。

ア 普遍 イ 統合 ウ 総合 エ 包括

問3

次の名詞の中から種類の違う名詞を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 運動会 イ スポーツ ウ 東京 エ 夏休み

問4

次の文のうち、ぼうせん部が修飾語の文節になっているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア のんびりと猫が眠っている。 イ 雨が激しく降っている。

ウ これから大切な話をします。 エ もしもし、きこえますか。

以下余白

—